

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.197

July 2018

反骨者の真実を求めて

中野博文

「戦争になったとき、まっさきに犠牲者となるのは、真実である」。

いまから30年ほど前、この言葉をめぐって西川正雄さんと話したことがある。とある学会誌で、西川さんはそれを米国上院議員ハイラム・ジョンソンの発言と紹介された。このとき、私はジョンソンの書簡集をもとに博士論文の一部を書いていたので、出典が気になり、おたすねした。西川さんが委員長を務め、私も委員に名を連ねた学会の運営委員会が終了し、雑談をしていたときのことであったと思う。

西川さんは少しだけ待ってほしいと言われた。その数日後、丁寧なはがきが届き、そこには、洒落たことを言うので使ったものの、二次文献を見ただけなので出典はわからない、ただ名言事典にはジョンソンの言とあると記されていた。まだ卵であったとはいえ、研究者を志していた私は、ヨーロッパ近現代史の重鎮である西川さんの学問的真摯さに感じるところがあった。

それで、次にお会いした際、おそらくこの発言は、1917年スパイ法の制定時、政府が導入を目指していた報道検閲を阻止すべく、ジョンソンが先陣に立って戦ったときのものであると、お伝えした。

これは、西川さんが『第一次世界大戦と社会主義者たち』を公刊して二年ほどたった頃であった。1912年大統領選挙において革新党の副大統領候補となったジョンソンは、1916年選挙で連邦上院議員に当選し、ウィルソン政権が進める市民的自由の抑圧に敢然と立ち上がる。社会主義者の国境を越えた反戦活動をテーマにされていた西川さんが、こうしたジョンソンの戦いに関心を示されたのは自然なことであったように思う。

ジョンソンは戦争でアメリカ民主主義が損傷を被っていることを、心より憤っていた人物である。こうした戦争への反発は、彼の息子アーチボルドが西部戦線に出征して、心を病んで復員したことで増幅される。アーチボルドは1933年、自ら命を絶つが、このことが一つの原因となり、ジョンソンは第二次大戦前夜、断固とした反

戦派になる。20歳代であった私は、第一次大戦のあやまちを繰り返すまいとしたジョンソンの人生は、急進的自由主義を奉じる「反骨者」の一つの在り方を示しているように思えた。

そこで彼の資料をもとに、戦間期アメリカの再評価を試みたが、勉強するうち、ジョンソンの急進主義には強烈な保守的側面があることも見えてきた。ウィリアム・ボラとともに、ソ連との友好関係樹立運動を展開したのもジョンソンなら、対日強硬派として1924年移民法を推進したのもジョンソンなのである。また、彼は政党のマシーン政治を打倒した政治家であったが、そのために彼が築いた革新党組織は、より徹底したマシーンになった。こうした二面性を整合的に理解することは、大学院生時代には到底できなかった。ジョンソンと同じく、シオドア・ローズヴェルト派に属するヘンリ・スティムソンの文書を読んで、革新主義者の間に存在した複数の政治潮流を整理し、なんとか博士論文の完成はできたものの、ジョンソンの人物像を全体的に理解する鍵を得たと思えるようになったのは、50歳を越えてからである。

「反骨者」としての一面のみを見て、現実を生きた人間の全体像に目をつぶっては、研究者ではない。なぜか、最近、若輩の私にまっすぐに向き合ってくれた西川さんの温厚なお顔を思い出す。平時でありながら真実の重みが失われかけている時代のせいかもしれない。あるいは、アメリカ民主主義そのもののなかに、有権者の差別意識をかきたてて、政治権力を掌握し維持しようというデマゴグ政治が根を張っていることを、見せつけられたからかもしれない。

学問とは時間の中で成熟し、人と関わる中で広がり生まれる。西川さんの学恩にこたえるには、自由の抑圧に抗議した人々の功だけでなく、その罪をも明らかにし、彼らを突き動かしていたものは何か、より幅広く、より深く探るしかない。若手研究者と誠実に交際するなかで、この課題を果たしていければと願っている。

(北九州市立大学)

新会長挨拶

2018年6月2日、3日の両日に北九州市立大学で開催された年次大会で会長に就任いたしました。宇沢美子、貴堂嘉之両副会長を始めとする常務理事の方々に力強く支えていただきながら、会員の皆さまの研究・教育活動に資する学会運営ができるよう尽力してまいりたいと考えております。久保文明前会長が当該担当常務理事と共に手掛けられた、若手会員への支援の強化、年次大会の国際化、会誌の市販化、ウェブサイトのセキュリティ強化、事務体制の充実等を始めとする種々の改革を常務理事の皆さまと共に引き続き力を入れて取り組みたいと思っております。

2016年6月に予定されていた熊本県立大学での年次大会は、熊本地震の影響で会場が急遽東京女子大学に変更されました。熊本での開催のために企画された様々なイベントやカントリーミュージックのコンサートが、今回改めて北九州市で実現できましたことは、当時、年次大会企画担当常務理事を拝命しておりました私にとって、感慨深いものがあります。

今年の年次大会は、沖縄を除いて九州では初めての開催となりました。九州という地域に日米関係の黎明期の文化交流があり、近代女子教育を力強く推し進めた、矢島榊子ら傑出した〈猛婦〉の誕生につながる種が横井家や矢島家の人々、そしてリロイ・ジェーンズ等によって蒔かれていたことを学ぶ大変貴重な機会となりました。このような九州を基盤とした日米文化交流に目を開かせてくださった松岡泰会員、中野博文会員を始めとする関係者に感謝いたしますとともに、様々な地域の草の根からあぶり出されるアメリカとの多様な接点を探ることの重要性を再認識しております。また、このたびのイベントや年次大会をご支援くださった北九州市やアメリカ研究振興会を含む諸機関の方々に深く感謝申し上げます。

アメリカとの文化交流について言えば、皆さまもご存じの通り、初の官費女子留学生として渡米した津田梅子が創設した女子英学塾（津田塾大学の前身）の源流にもアメリカとの緊密な繋がりが早くからありました。加えて、津田塾はアメリカ学会の源流とも注目すべき接点があったと言えます。新渡戸稲造は、1929年11月から1933年7月まで社団法人女子英学塾の理事を務めています。第一次アメリカ学会の創設者である高木八尺は、1933年7月から1954年5月まで財団法人津田英学塾（1951年3月まで）及び学校法人津田塾大学（1951年3月から）の理事を、また、1947年10月から1954年5月まで同理事長を務め、計21年間、津田塾の運営に貢献しています。また、彼の実父、英学者の神田乃武が1883年、アメリカから帰国して5ヶ月の津田梅子の自宅を訪ねてきたことが、津田梅子がホストマザーであるアデライン・ランマンに宛てた書簡に記されています（1883年4月27日）。当時アメリカ留学を経験した数少ない若者たちの間で交流があったことが窺えます。アメリカはもちろんのことアメリカ研究と津田塾大学との長く深い縁をあらためて確認する次第です。

さて、松本悠子元会長が編集委員長を務められ、アメリカ学会50周年記念事業の一つとして刊行された『アメリカ文化事典』（丸善出版、2018年1月）が、出版から半年という驚異的なスピードで重版されるという嬉しいニュースが年次大会直後に飛び込んでまいりました。本事典の上梓に尽力された編集委員長を始め編集幹事や編集委員、そして執筆者の皆さまに、アメリカ学会を代表し、また、編集委員の一人としてこの場をお借りして感謝申し上げます。

これから2年間、会員の方々のご意見やご要望を伺いつつ、皆さまの研究・教育活動に貢献する学会となりますよう力を尽くしたいと身の引き締まる思いでおります。学会活動や学会運営への積極的なご参加とご協力を心からお願い申し上げます。

高橋 裕子

2018-2019 年度役員一覧

会長

高橋 裕子（津田塾大）

副会長

宇沢 美子（慶応義塾大）

貴堂 嘉之（一橋大）

斎藤眞賞選考委員会委員長兼任

清水博賞選考委員会委員長兼任

常務理事

岡山 裕（慶応義塾大）

小野 直子（富山大）

西山 隆行（成蹊大）

清水さゆり（ライス大）

佐久間みかよ（学習院女子大）

兼子 歩（明治大）

中野 勝郎（法政大）

土屋 由香（京都大）

杉山 直子（日本女子大）

前嶋 和弘（上智大）

会務委員会会務担当

会務委員会会務担当

会務委員会財務担当

年次大会企画担当

年次大会企画担当

年次大会企画担当

年報編集委員会

国際委員会

英文ジャーナル編集委員会

広報・電子化情報委員会

理事（選挙選出）

井口 治夫（関西学院大）

岡山 裕（慶応義塾大）

貴堂 嘉之（一橋大）

佐久間みかよ（学習院女子大）

舌津 智之（立教大）

土屋 由香（京都大）

長畑 明利（名古屋大）

西山 隆行（成蹊大）

肥後本芳男（同志社大）

待鳥 聡史（京都大）

矢口 祐人（東京大）

渡辺 靖（慶応義塾大）

伊藤 裕子（亜細亜大）

小野沢 透（京都大）

倉科 一希（広島市立大）

佐々木卓也（立教大）

竹沢 泰子（京都大）

中野 勝郎（法政大）

中山 俊宏（慶応義塾大）

新田 啓子（立教大）

前嶋 和弘（上智大）

松原 宏之（立教大）

和田 光弘（名古屋大）

宇沢 美子（慶応義塾大）

川島 浩平（早稲田大）

小檜山ルイ（東京女子大）

杉山 直子（日本女子大）

土屋 和代（東京大）

中野耕太郎（大阪大）

西崎 文子（東京大）

橋川 健竜（東京大）

増井志津代（上智大）

村田 晃嗣（同志社大）

渡辺 将人（北海道大）

理事（会長推薦）

大森 一輝（北海学園大）

兼子 歩（明治大）

清水さゆり（ライス大）

大類 久恵（津田塾大）

喜納 育江（琉球大）

中野 博文（北九州市立大）

小野 直子（富山大）

佐藤千登勢（筑波大）

平体 由美（東洋英和女学院大）

監事

遠藤 泰生（東京大）

大津留（北川）智恵子（関西大）

森本あんり（国際基督教大）

アメリカ学会 2017 年度事業報告

1. 会員数

2017 年度は会員の会費納入歴を検証のうえ、規約第 2 章 6 条 (5)「年会費を 3 年間滞納すると退会処分となる」に基づき 8 名を除名した。他方で、学会参加費補助や院生会員の入会后 10 年間にわたる無条件の院生会費の適用等の若手研究者支援策が功を奏し、昨年を上回る数の新入会員を迎えることができた。

2018 年 3 月 31 日現在の会員数は 1,176 名（前年度末 1,161 名）。

新入会員 39 名（一般 20 名、院生 16 名、維持 2 団体、海外 1 名）

退会員 23 名（除名 8 名、逝去 1 名、希望退会 14 名）※他二重登録者の抹消 1 名

2. 理事・監事の改選

2018 年 1 月 22 日を締め切りとして理事・監事選挙を実施し、高田馨里・山本裕子両会員の立ち会いのもと 2 月 3 日に開票した。投票総数は 151 票となり、集計の結果、理事については上位 34 名が選出され、監事についても得票順に 3 名を決定した。

3. 学会インターネットサイトへの不正アクセス問題

2017 年 7 月、学会が管理するインターネットサイトに不正侵入があった。委細については以下、広報・電子化情報委員会報告を参照されたい。

4. 『アメリカ文化事典』の出版

2018 年 1 月、丸善出版より『アメリカ文化事典』が刊行された。これを持ち、2016 年度より継続していた学会創立 50 周年記念事業が完結された。

5. 会務委員会

学会運営と財政の適正化を図るため、会員の動静把握と会費納入の促進に尽力した。また、理事・監事選挙を行った。

6. 年次大会企画委員会

2018 年度年次大会（第 52 回）は、会報第 196 号に記載の要領に従い、北九州市立大学にて 6 月 2～3 日に開催された。また 6 月 1 日には開催校北九州市立大学によるプレイベント「九州がすすめる草の根日米交流」が行われた。今回、アメリカ研究振興会からの助成を得て、6 月 2 日の OAH 会長・アメリカ学会会長講演シンポジウム及びラウンドテーブルは一般公開とし通訳サービスを提供し、若手会員の参加を促すため旅費補助を行った。2019 年度年次大会（第 53 回）は、法政大学にて、2019 年 6 月に開催予定である。

7. 年報編集委員会

①出版社の都合により、年報『アメリカ研究 (The American Review)』第 52 号の刊行が遅延したが、2018 年 6 月に市販・配布された。

②会報『アメリカ学会会報 (The American Studies Newsletter)』第 194 号 (7 月)、第 195 号 (11 月)、第 196 号 (4 月) を発行した。

8. 英文ジャーナル編集委員会

英文ジャーナル *The Japanese Journal of American Studies* 第 28 号を 2017 年 7 月に刊行した。

9. 清水博賞選考委員会

第 23 回アメリカ学会清水博賞を 1 名に授与した。

10. 斎藤眞賞選考委員会

第5回斎藤眞賞を2名に授与した。

11. 広報・電子化情報委員会

年間を通じて学会ウェブサイトの管理と更新ならびにメーリングリストの管理に加え、各種広報戦略業務について協議を進めた。

*メーリングリスト管理のサイトへの不正侵入問題について

アメリカ学会常務理事会を騙るメールが2017年7月20日夜、および24日夕方に会員のアドレスに一斉送付され、各種運営委員会のメーリングリストが破壊されるなどの被害を受けた。委員会では、各方面への対応を行うとともに、セキュリティ強化のための改善策を講じてきた。

12. 国際委員会

(1) 以下の事業を行った。

① 2017年度JAAS年次大会にてワークショップA/B “Framing the ‘American Century’: Movements for Social Justice”を開催した。

② ASAとの共同プロジェクトとして津田塾大学と立命館大学でプロセミナーを開催した。

③ OAH短期滞在プログラムを立教大学と大阪大学で実施した。

④ ASAKの年次大会（2017年9月22日～23日）に宇沢美子副会長、若林麻希子会員を派遣した。

(2) アメリカ学会海外渡航奨励金

2017年度前期1名、後期2名に給付した。後期募集より、①大学院生会員は発表の有無に関係なく応募が可能とし、

②アジア圏以外はこれまでの10万円から15万円支給に変更した。

(3) 2017年度ASA年次大会委員派遣、共催セッション開催、日米友好基金の大学院生補助給付

2017年11月9日～12日にシカゴで開催された年次大会に国際委員1名を派遣、日米友好基金による年次大会参加費用補助金を計3名に給付した。ASA-JAAS共同セッションを企画し、2つのパネルにJAAS会員計5名が報告者として参加した。アメリカ研究振興会の助成を受けた。

(4) 日米友好基金給付金によるASA研究者の2018年度JAAS年次大会招聘者決定

2018年度招聘研究者をイリノイ大学アーバナシャンペーン校のJunaid Rana氏、ニューヨーク大学のJay Garcia氏に決定した。

(5) 日米友好基金給付金によるOAH研究者短期滞在プログラムのゲスト研究者決定

福岡大学（6月1日～14日）にハバフォード大学のBethel Saler氏、中央大学（5月29日～6月11日）にジョージタウン大学のKatherine Benton-Cohen氏が決定した。

(6) 2018年度OAH年次大会委員派遣、共催セッション開催、日米友好基金の大学院生補助給付

2018年4月12日～14日にサクラメントで開催された年次大会に国際委員1名を派遣し、日米友好基金による年次大会参加費用補助金を計3名に給付した。OAH委員会との共催により共同セッションを開催し、JAAS会員2名が報告を行った。

(7) ASAK研究者2018年度JAAS年次大会招待者およびASAK年次大会派遣JAAS会員

2018年度JAAS年次大会には、Yangoon Kim会長およびJunyon Kim氏が参加。9月14日～15日ソウルにて開催の年次大会に高橋裕子次期会長、下條恵子会員を派遣することに決定した。

(8) 2019年OAH研究者短期滞在プログラムのホスト校決定

成城大学（担当：佃陽子会員）、東北大学（担当：竹林修一会員）に決定した。

(9) 2018年度JAAS年次大会ワークショップA/Bの決定

2018年度JAAS年次大会で開催されるワークショップA/B “Transpacific Overtures: The Black Atlantic and Settler Colonialism”を決定した。

(10) 2018年度プロセミナー開催

2018年6月6日に京都大学、6月8日に東京大学で開催されるプロセミナーを決定した。

(11) 6月1日夕食会

大会前夜の6月1日に海外ゲストとワークショップ登壇者を招待してウェルカム・ディナーを開催した。出席者30名。

13. 将来構想委員会

昨年度の総会で承認を得た学会の規約改訂について、会報および学会HPにおいて広報活動を行った。また年報市販化に向け、出版社と交渉し、実現させた。なお、2017年度より施行されている新規約詳細については、学会HP「お知らせ」欄よりダウンロードできる。

14. 名誉会員の推挙

理事会にて古矢旬元会長が名誉会員に推挙され、承認された。

~~~~~  
**アメリカ学会清水博賞第23回受賞作品と第24回公募のお知らせ**

故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、1996年度より「アメリカ学会清水博賞」が設けられている。同賞は、若手会員による最初の単著として刊行された著書のなかから特に優れた作品に授与されるものである。

第23回清水賞候補作として、2017年1月1日から12月31日の期間に出版された著書のなかから、9点の作品の推薦が寄せられた。その後、外部査読・内部査読を経て、厳正な審査の結果、以下の作品に清水博賞が授与された。

**第23回受賞作品：**

笠井俊和『船乗りがつなぐ大西洋世界——英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』見洋書房、2017年

査読に協力いただいた15名の会員に感謝申し上げます。また、2018年内に出版される作品について、会員諸氏からの積極的な推薦（自薦・他薦）をお願いする。件名「第24回清水博賞候補推薦」として2019年1月10日（木）までに清水博賞選考委員会宛にメール（shimizu@jaas.gr.jp）を寄せられたい。

清水博賞選考委員会

~~~~~  
アメリカ学会斎藤眞賞の第5回受賞作品について

「アメリカ学会斎藤眞賞」は、故斎藤眞会員のご遺族からの寄付金を基金として、2009年度から設けられました。同賞は授賞を隔年とし、その直近2年間の『アメリカ研究』および *The Japanese Journal of American Studies*（英文ジャーナル）に掲載された論文のなかから、若手による優秀な作品に、賞金3万円と賞状を贈るものです。

第5回アメリカ学会斎藤眞賞は、『アメリカ研究』50, 51号、*The Japanese Journal of American Studies* 27, 28に掲載された9本の論文を審査対象とし、4名の委員による厳正な審査の結果、以下の2点の作品が受賞されました。

第5回受賞作品：

関口洋平「『イクメン』の誕生と新自由主義——20世紀後半アメリカにおける白人中流階級の父親の表象について——」（『アメリカ研究』51号、2017年）。

小泉由美子「愛国の響き——ティモシー・ドワイトの詩『グリーンフィールド・ヒル』（1794年）第四部「ピークオッド族の壊滅」を読む——」（『アメリカ研究』51号、2017年）。

斎藤眞賞選考委員会

2017 年度決算および 2018 年度予算

さる 6 月 3 日の総会において、2017 年度決算および 2018 年度予算についてご承認をいただきました。ここに収支報告および予算案を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2017 年度の収支報告は、

出納帳その他の関連書類とあわせて、林義勝、増井志津代各幹事の監査を受け、適切と認める旨の監査報告書が提出されていることをご報告いたします。

(財務担当 佐藤千登勢)

アメリカ学会 2017 年度 収支報告

□収入の部

科 目	2017 年度予算(a)	2017 年度決算(b)
1. 年会費	9,000,000	9,601,000
2. 雑収入(雑誌売上, 利息)	400,000	311,078
3. 広告収入	30,000	12,000
4. 渋沢栄一記念財団助成金	0	0
5. アメリカ研究振興会助成金	500,000	500,000
6. 日米友好基金(OAH)	1,976,410	1,976,410
7. 日米友好基金(ASA)	351,716	351,716
小 計	12,258,126	12,752,204
8. 前期繰越金	16,914,394	16,914,394
合 計	29,172,520	29,666,598

アメリカ学会 2018 年度 予算案

□収入の部

科 目	2018 年度予算
1. 年会費	9,000,000
2. 雑収入(雑誌売上, 利息)	400,000
3. 広告収入	30,000
4. 寄付金	158,506
5. アメリカ研究振興会助成金	1,448,840
6. 日米友好基金(OAH)	1,982,751
7. 日米友好基金(ASA)	430,000
小 計	13,450,097
7. 前期繰越金	17,353,156
合 計	30,803,253

□支出の部

科 目	2017 年度予算(a)	2017 年度決算(b)
1. 会務費	2,990,000	2,913,954
01 事務局人件費	600,000	600,000
02 業務委託費	950,000	957,096
手数料	20,000	20,896
03 常務理事会費	300,000	303,900
04 会費郵送通信費	130,000	107,343
05 事務用品費	100,000	179,981
06 広報・電子化情報委員会費	150,000	163,522
07 将来構想委員会費	170,000	0
08 名簿作成費	0	0
09 選挙関連費	400,000	383,384
10 口座振替・郵便振替手数料	120,000	173,890
11 会務雑費	50,000	23,942
2. 研究事業費	11,350,000	9,399,488
01 年次大会費	2,000,000	820,434
(1) 準備費	300,000	300,000
(2) 大会費	1,200,000	480,434
(3) 企画委員会費	500,000	40,000
02 国際交流費	3,000,000	3,671,000
(1) 国際交流活動費	450,000	476,000
(2) OAH 短期滞在	1,700,000	1,700,000
(3) ASA 年次大会派遣	150,000	235,000
(4) OAH 年次大会派遣	200,000	360,000
(5) 海外渡航奨励金	500,000	900,000
03 年報刊行費	3,200,000	2,322,856
(1) 年報編集委員会費		647,407
(2) 年報印刷費		1,416,332
(3) 年報郵送通信費・雑費		259,117
04 英文ジャーナル刊行費	1,700,000	1,333,831
(1) 英文編集委員会費		37,000
(2) 英文印刷費		743,806
(3) 英文郵送通信費・雑費		193,025
(4) コピーエディター雑費		360,000
05 会報刊行費	950,000	1,080,398
(1) 会報印刷費		533,629
(2) 会報郵送通信費		546,769
(3) 会報雑費		
06 清水博賞委員会費	300,000	170,969
07 斎藤眞賞委員会費	50,000	0
08 研究教育支援費	150,000	0
09 研究事業予備費	0	0
小 計	14,340,000	12,313,442
3. 次期繰越金	14,832,520	17,353,156
合 計	29,172,520	29,666,598

□支出の部

科 目	2018 年度予算
1. 会務費	3,120,000
01 事務局人件費	600,000
02 業務委託費 委託料	950,000
手数料	20,000
03 常務理事会費	300,000
04 会費郵送通信費	130,000
05 事務用品費	100,000
06 広報・電子化情報委員会費	500,000
07 将来構想委員会	0
08 名簿作成費	200,000
09 選挙関連費	100,000
10 口座振替・郵便振替手数料	120,000
11 会務雑費	100,000
2. 研究事業費	11,650,000
01 年次大会費	2,100,000
(1) 準備費	300,000
(2) 大会費	1,500,000
(3) 企画委員会費	300,000
02 国際交流費	3,200,000
(1) 国際交流活動費	500,000
(2) OAH 短期滞在	1,700,000
(3) ASA 年次大会派遣等	300,000
(4) OAH 年次大会派遣	200,000
(5) 海外渡航奨励金	500,000
03 年報刊行費	3,200,000
(1) 年報編集委員会費	
(2) 年報印刷費	
(3) 年報郵送通信費・雑費	
04 英文ジャーナル刊行費	1,700,000
(1) 英文編集委員会費	
(2) 英文印刷費	
(3) 英文郵送通信費・雑費	
(4) コピーエディター雑費	
05 会報刊行費	950,000
(1) 会報印刷費	
(2) 会報郵送通信費	
(3) 会報雑費	
06 清水博賞委員会費	300,000
07 斎藤眞賞委員会費	50,000
08 研究教育支援費	150,000
09 研究事業予備費	0
小 計	14,770,000
3. 次期繰越金	16,033,253
合 計	30,803,253

新刊紹介

中村理香 著

『アジア系アメリカと戦争記憶』

——原爆・「慰安婦」・強制収容』

(青弓社, 2017年, 3,240円)

本書はアジア系アメリカ人文学における戦争記憶の在り方を論じるものだが、未だ解決しない慰安婦問題など戦争における負の局面に対し、恐れず向かい合い、対話していくことの大切さを説いている。まずはこのような「重い」課題にひるむことなく、極めて冷静かつ客観的に分析し考察する中村理香氏の真摯な研究姿勢を高く評価したい。

序章「二つの戦争展と被害／加害の記憶」は、1995年におけるスミソニアン原爆展と2012年の東京・ニコンの「慰安婦」展という二つの中止圧力を受けた展覧会についての説明から始まる。それぞれの展覧会へのアメリカおよび日本での抗議には、「自らを被害者としてだけ一義的に定義」し、「自国の被害に固執する一方で加害は徹底的に否認する」という同質の姿勢があると中村は指摘する。中村はこのような単純で一面的な論理に異議を唱え、複数の暴力に向かい合うことの必要性を説き、国家の物語に回収されない言説の在り方を探ろうとする。即ち、アジア系アメリカ人作家たちが紡ぐ戦争記憶に、国家単位を超えた太平洋横断リドレス（補償是正）を切り拓く可能性を中村は見ているのである。

本書は第二部で構成される。第一部「アジア系アメリカと「慰安婦言説」」は、2003年のアジア系アメリカ学会誌の特集号の議論を起点として、日系およびコリア系の政治家および活動家の慰安婦問題に対する発言を検証する。戦争記憶をめぐる問題は何を記憶として留めるのか、どのような語りをするのかが常に問題となる。K・チュウ、ローラ・ヒュンニ・カン、米山リサの論に言及しながら、中村はアジア系批評家や作家たちの「アメリカ帝国」および日本の軍事的暴力への視座を紹介し、グローバル社会における太平洋横断リドレスの言説の構築に向けてアジア系アメリカ人作家たちがいかに闘い続けているかを論じる。現地での追悼碑を追う中村の調査は、戦争記憶に対するアメリカの現実をリアルに伝え、大変興味深い。

第二部ではノラ・オッジャ・ケラーの『慰安婦』、チャンネ・リーの『最後の場所で』、ジョイ・コガワの『おばさん』が具体的に論じられる。ケラーが元「慰安婦」の母を持つコリア系アメリカ人の娘の視点から作品を紡ぐのに対し、リーの小説では日本人として日本軍に協力した朝鮮人男性の視点から物語が語られる。両作品が対して並べられることで考察が深められている。さらにカナダでの日系人強制収容や先住民への抑圧問題と長崎原爆を連結させるコガワの作品では、「脱ナショナル」な記憶形成が模索されていると論じられる。このように北米のアジア系作家が用いる二重の視点に注目することで、本書は作家たちが提示する複雑に絡み合った戦争暴力と次世代にも引き継がれる戦争記憶を論証している。本書が日本のアメリカ研究者にとって必読の書であることは間違いない。

中地 幸 (都留文科大学)

藤田尚則 著

『アメリカ・インディアン法研究 (III)』

——部族の財産権』

(北樹出版, 2017年, 10,260円)

「インディアンの権利は、白人が制定したインディアンに関する法律に基づいて、白人による解釈によって決定される。この解釈は一方的であるがゆえに、インディアンの法的権利にまつわる数多くの論争を生み出している。」この一文は、先住民出身の知識人ドナルド・フィクシコの著書からの引用である。(Fixico, Donald. *Daily Life of Native Americans in the Twentieth Century*. Greenwood Press, 2006.) では、フィクシコのいう「法律」と「解釈」と「論争」とは、具体的にどのようなものだったのだろうか。本書は、こうした先住民に関する「法」全般いわゆる「インディアン法」にまつわる疑問に対し、法学研究の立場から詳細な解説と考察を加えた研究書である。前二著に続いて、本書は「インディアン部族の財産権を扱うシリーズ第III巻」(3頁)と位置付けられている。

本書によれば、「インディアン部族の財産権」の根幹を成すものは、土地に関する諸権利である。そのため、第一章から第四章までは、先住諸社会の土地保有形態の諸類型に続いて、土地の譲渡やリース、整理統合、公用収用などに関する主要な制定法と判例が主な分析対象となっている。これらの章では、歴史的展開のみならず、最新の事例にも目配りがされている。先住民の土地問題について、近年の動向を踏まえた基本情報を得たい読者の要望にも応えている。

続いて、第五章から第八章では、森林資源や地下資源、狩猟・漁業・採集権、水利権について検討している。著者によれば、「インディアン部族は、合衆国において3番目に大きな鉱物資源の保有者」であるという(20頁, 403頁)。その資源に関して、裁判所の判例の膨大な蓄積があり、きわめて複雑な様相を呈していることがわかる。巻末の判例索引が充実しており、読者の理解を促す一助となっている。

本書を通じて、アメリカ先住民にとっての法の重要性が改めて浮き彫りになったといえるだろう。本書では、様々な制定法と判例が頻繁に引用されており、さらに歴史的にも地理的にも広範にわたる事例への言及がなされている。それだけに、先住民研究になじみのない読者には、やや難解と思われる箇所があることは否めない。ただし、冒頭で引用したフィクシコを再び引き合いに出すまでもなく、先住民にとって、法は、まさに日常生活に直接影響を及ぼす存在である。その意味で、法学研究としての「インディアン法」研究の成果である本書は、先住民研究、ひいてはアメリカ(史)研究としても、広く参照されるべき専門書といえるだろう。

中野由美子 (成蹊大学)

吉田美津 著

『場所』のアジア系アメリカ文学
——太平洋を往還する想像力』

(晃洋書房, 2017年, 3,132円)

本書では、「場所」をキーワードとしてアジア系アメリカ文学を読み解く論考が4部10章で展開される。まず、「アジア／パシフィックの想像力」と題された序は、ジャンス・ミリキタニとローソン・フサオ・イナダの詩を巧みに引用し、アジア系アメリカ文学にとって「場所」が持つ重要性を鮮やかに浮き彫りにしている。著者が明確に定義しているように、本書における「場所」とは、「具体的な場所であると同時に、描出される風景やそれらを捉えるアイデンティティのあり様とその視点の立ち位置をも含意するもの」(17)である。そのようなメタフォーリカルな場所の諸相を解明するため、著者は広大なアジア系アメリカ文学の領野から精選した作品を丹念に読み解いていく。

第1部で取り上げられる作家はマキシーン・ホン・キングストーンである。『アメリカの中国人』に登場するアメリカ社会に帰属できない中国人労働者たちの不安定なアイデンティティが、「パストラル・パラダイス」としての19世紀ハワイやフロンティア精神、白人たちが理想とする「サブライム」な自然観などを相対化していく様が論じられる。第2章では、同じ作家の『トリップマスター・モンキー』が取り上げられ、孫悟空をまねるトリックスター的な主人公・中国系のウィットマンと、彼の劇に参加する雑多な無法者たちが生み出す「異種混交の劇空間」(63)が、「アメリカ側」と「アジア側」が互いに独立して存在する対立物ではなく、互いに浸透し合う運命共同体であることを暗示している点が指摘される。続いて、「チャイナタウンの地政学」と題された第2部では、エイミ・タン、フェイ・ミエン・イン、前述のキングストーンがそれぞれ描き出す三者三様のチャイナタウンの様相が論じられる。第3部は、ヴェトナム系作家の考察に充てられている。まず第6章では、風景描写とそれが構築する作家の自我意識をテーマにして、主にジェイド・ゴック・コワン・フィン、グエン・クイー・ドック、キエン・グエンの三人が論じられる。第7章は、レ・リ・ヘイスリップの回想録を取り上げ、アメリカ社会における彼女の自己形成のうちに、儒教精神とプロテスタントの労働倫理と深く結びついた「モデル・マイノリティ」言説を指摘する。第8章は、ラン・カオの『モンキー・ブリッジ』の主人公であるヴェトナムから移民してきた少女に焦点を当て、ヴェトナムとアメリカに代表される二つに分裂した世界に生きざるを得ない「15世代」特有の葛藤を論じている。最後に第4部では、本書の中心概念のひとつである「開かれた場所」をめぐる、カレン・テイ・ヤマシタの小説が論じられる。

上記の概要は著者が「場所」にこだわり展開する精緻な議論のごく一部にすぎない。実際に各論考を読めば、選りすぐりの作家と作品で広大なアジア系アメリカ文学の本質を浮かび上がらせてみせる著者の確かな鑑識眼と洞察力の深さに納得されるだろう。

風早由佳 (岡山県立大学)

上坂 昇 著

『カリフォルニアのワイン王 薩摩藩士・長沢鼎
——宗教コロニーに一流ワイナリーを
築いた男』

(明石書店, 2017年, 2,808円)

外国と日本との文化交流は、先進国との関係で言えば、もっぱら、「今来神」の「招聘」の物語、すなわち、すぐれた文化を持ち来たった彼の地からの外国人や留学してそのような文化に触れた日本人による「霊力」の伝道の物語として語られがちである。日本を出て行って彼の地で活躍した場合には、日本以外はみな「世界」ということなのか、「世界の中心」であるとか「世界のイチロー」のように、無国籍化した「国際人」となる。新渡戸稲造も「世界が尊敬した真の国際人」として紹介されている。薩摩藩が1865年にイギリスに派遣した15名の留学生たちのほとんどは、森有礼をはじめとして、明治国家建設に際しての、「霊力」の伝道者であったといえよう。それらの留学生のうち、ただ一人、イギリスを経て合衆国に渡り、終生そこに留まった薩摩藩士が長澤鼎である。しかし、長澤は「国際人」とは呼ばれていない。そもそも、ほとんどの日本人に知られていない名前である。一部のワイン通もしくは鹿児島県人だけがその名を知っているとよいかも知れない。「カリフォルニアのワイン王」として。

本書は、長澤鼎の足跡をたどった伝記的研究である。著者の関心は、「異端のキリスト教を提唱する」トマス・レイク・ハリスの宗教コロニーで、「その教えを実践しながらワイナリー経営者」に育っていった経緯を解明することであったという。しかし、著者自身がのべているように、長澤が「どこまで宗教コロニーでハリスの説くキリスト教を受け入れ、信仰として生活のなかで実践していたかについては、「資料不足」であるということ、解明されていない。

そうではあるものの、本書は読む者をあまり問われることのない疑問に導く。それは、合衆国は移民にとっての再生の場所であったのにたいし、再生を求める必要のなかった武士階級のエリートが、なぜ移民としてアメリカ人になる道を選んだのかという疑問である。イギリス留学時から宗教コロニーまで長澤とともにいた森有礼と鮫島尚信は、明治元年、ハリスに「国事に尽くすべし」と命じられ帰国したが、長澤は、帰国を許されなかったという。明治四年、森がアメリカ公使として赴任したとき、長澤はかれに帰国の意思を示したが、森はそれを受け入れなかったという。そのとき、長澤19歳。合衆国に残った長澤は、コーネル大学に入学するも、半年もたないうちに退学し、「心の葛藤」と霊的な体験を経て、関心を宗教からワイン栽培へ向けていったという。

新生日本にとって「将来よりよい有用な人材になると心より感じています」と確信しながら、それが受け入れられず、いわば「棄民」となった長澤。菊池寛は、「海外に雄飛した人々」の一例として、長澤を取り上げているという。だが、「雄飛」して「ワイン王」となった薩摩の偉人として言祝ぐことができるほど、薩摩武士からアメリカ人になる過程は成功物語ではなかったのではないか。すくなくとも長澤自身にとっては。本書は、その問いへと誘っている。

中野勝郎 (法政大学)

第53回年次大会 企画・報告募集のお知らせ

第53回年次大会は、2019年6月1日（土）、2日（日）に法政大学にて開催を予定しております。大会での自由論題報告と部会企画案を下記の通り募集します。

会員のみなさまからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は大会事務局（program@jaas.gr.jp）宛に、1～3のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：11月20日）

報告テーマ、1,500字程度の要旨、およびキーワード5つを記載。

自由論題での報告は、海外在住の場合（下を参照）を除き、会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象とします。

〈海外在住の非会員〉 第52回年次大会より、海外在住の方（国籍を問わない）は、非会員のままで自由論題での発表が1回のみ可能になりました。ただし、報告が決定した場合は、3月1日までに大会参加費（12,000円・懇親会費を含む）の支払いが必要となります。大会参加費は返金不可となっておりますのでご了承ください。

報告者には2019年5月15日までにペーパー（和文の場合、8,000字～12,000字、英文の場合、5,000～7,500 words程度）を提出していただき、学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後2週間のみペーパーを掲載します。なお、報告内容は未発表のものとし、応募者多数の場合は要旨に基づく選考を行うことがあります。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。

2. 「部会の企画提案」（締切日：9月6日）

部会のテーマおよび800字程度の要旨をお送りください。報告者案があればあわせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申し合わせ事項にご留意ください。第51回、52回大会の部会、シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第53回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整をお願いするため、原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金、交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域のバランスに配慮してください。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とは致しません。院生など、若手の応募を積極的に歓迎いたします。

3. 「分科会開催の申し込み」（締切日：8月31日）

新規の場合は、分科会趣旨（400字以内）と、連絡責任者および賛同者5名の氏名をお知らせください。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることをあらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

2017年に出版された英語著作、英語論文（博士論文を含む）に関する情報を学会ホームページ <http://www.jaas.gr.jp/2014/09/post.225.html> で示されている形式に従ってご記入のうえ、電子メール本文に貼りつけて、9月22日までに学会英文ジャーナル編集委員会宛（engjournal@jaas.gr.jp）にお送りください。指示された形式にしたがって原稿を作成していただきますよう、お願いいたします。なお、本英文ジャーナル掲載の論文については、この英文書誌に収録しないことになっておりますのでご注意ください。

31号の特集テーマは“community”です。特集テーマの他、自由論題による投稿も受け付けます。投稿者はアメリカ学会の会員に限ります。投稿原稿応募申し込み（論文要旨）の締め切りは2019年1月、原稿締め切りは2019年5月です。詳しい日程については、11月の会報（あるいはそれ以前は学会ホームページ）をご覧ください。なお、『アメリカ研究』との二重投稿、あるいは日本語、英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

『アメリカ研究』第53号原稿募集について【申込み期間延長】

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2019年3月に第53号を刊行する予定です。投稿申込みは6月30日で締め切りましたが、一般投稿については、以下のように申込み期間の延長をいたしますのであらためてお知らせいたします。

- (1) 投稿希望者は、論文題目を付けて、電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で年報編集委員会に申し込んでください。締め切りは2018年8月21日（火）です。
- (2) 原稿の締め切り期日は2018年9月25日（火）。

＊

内 容：アメリカ研究に関する未発表論文、前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。

枚 数：論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。ほかに英文レジюме（500語）。執筆要項は学会ウェブサイト（http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html）を参照のこと。

会員登録情報更新のお願い

会員各位におかれましては、御所属や御住所、メールアドレスなどの異動がありましたら、速やかに学会事務局（office@jaas.gr.jp）までお知らせくださいますようお願いいたします。とくに本年は、新しい名簿の発行を予定しておりますので、編集作業を最小限にし、記載内容をより正確にするためにも、よろしくご協力をお願い申し上げます。

会務委員会

新入会員

Howard, John	キングズ・カレッジ・ロンドン (名) (英国)	社 環
島村直幸	杏林大学	外 政 史
沢登文治	南山大学	法
日野原慶	大東文化大学	文 化
下斗米秀之	敬愛大学	経 労 科
森下三郎	天理大学	宗 思 民
Kiliçarslan, Cem	ハジエテベ大学 (トルコ)	史 衆 文
佐藤里野	東洋大学	文 化
齊藤園子	北九州市立大学	文 化 教
烏克也	安田女子大学	文 化 衆
早川真理子	名古屋大学 (院)	文 ジ
実哲也	日本経済研究センター	経 政 外
三間美知太郎	東北大学 (院)	衆 史 民
塚田浩幸	東京外国語大学 (院)	史 文 政
富塚亮平	慶応義塾大学 (院)	史 文 政
茶城麻優子	慶応義塾大学 (院)	政 外

* 専門領域の略記については、PDF 版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による

編集後記

北九州市立大学で開催された年次大会に、初めて最初から最後まで参加した。早朝から大学院生たちの英語による丁々発止のディスカッションに背筋を伸ばす。シルコーやアレクシーの作品を通じてネイティブ・アメリカンの声に耳を傾け、米国内外の占領下を生き延びた人々の歴史を知ることまた、トランプ政権がもたらした分断の時代に異議を唱えることになりうるとの意を強くした。2016年に熊本県立大学で予定されていた大会前日企画が形を変えて実現し、チャーリー永谷氏による米軍兵士との貴重な交流の話が聞けた。ケンタッキー・ワルツが心に残った。

(齋木郁乃)

2018年7月30日 発行

アメリカ学会

〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502

学協会サポートセンター内

Tel: 045-671-1525 Fax: 045-671-1935

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 高橋裕子

編集人 中野勝郎

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5